

図書館だより

都城工業
高等専門学校
図書館

No. 68

FEBRUARY 2011



ハフェマウル ビョンサン ソウオン
「韓国 河回村の屏山書院」

特集

校内読書感想文コンクール入賞者発表

都城工業高等専門学校
Miyakonojo National College of Technology

人間の生涯ということ（下） 図書館長 望月高明 …… 1

知的オアシスとしての図書館 一般科目 田原良信 …… 3

特集

校内読書感想文コンクール入賞者発表

校内読書感想文コンクール入賞作品 …… 4

都城病院院長 小柳左門氏の講演行なわれる

演題 「学ぶこととすること」 …… 15

今年度の活動と図書委員会の在り方について

学生図書委員長 建築学科 池田成史
副委員長 機械工学科 浅野大樹 …… 16

ブックハンティング実施される …… 17
＜ブックハンティング＞で購入した図書控

図書館からのお知らせ …… 18

図書館開館予定

学年末・春季休業期間中の長期貸出について

編集後記

●表紙「韓国 河回村の屏山書院」

韓国・慶尚北道・安東市の郊外河回村にある書院。書院とは、朝鮮時代に設立された主に儒学を学ぶ私設の教育機関で、地方教育の一翼を担った。

屏山書院は、「豊岳書堂」が前身となっており、1572年に河回村出身の儒学者・柳成龍（李退溪の高弟）により現在の場所に移築された。

書院内には柳成龍の文集をはじめ、約1,000種3,000冊が所蔵されている。

書院の前には洛東江が流れ、その向こうの山々がまるで屏風のように書院を囲んでいる。韓国で一番美しい書院建築物として評価されている。

撮影 図書館長（一般科目） 望月 高明



人間の生涯ということ（下）

図書館長 望 月 高 明

三

前号で内田遠湖が山崎闇斎を領袖とする崎門学派に列なる学者であるといったが、彼はもちろん初めから儒学者であったわけではない。遠湖は明治時代のエリートに相応しく、初め医師を志し、東京大学医学部に進学した。彼が医学部に進んだのは、父親の意向がはたらいたのかも知れない。遠湖の父は勤王論を唱え、維新の際には東海道を下る官軍に加わって、函館戦争まで従軍した。それから大学に入って医学を修め、軍医となって西南の役にも従った。後に郷里浜松で病院を経営し、町長などになった。しかし、遠湖は明治17年に卒業を目前にして医学部を退学し、翌年2月に文学部哲学科の選科生となった。そして、好きな哲学と漢学に専心した。それにしても、遠湖はなぜ医学部を、それも卒業間際になって退学したのだろうか。私は彼のこの处世態度に非常に興味を覚えるのであるが、その動機に迫る資料を持ち合わせていない。これは推測の域を出ないが、彼が医学部を退学して文学部へと転じたのは、自己の本性の好むところに従ったといえないであろうか。遠湖が物質的な価値であるとか、世間的な名声とかいうようなものに大きな意義を見出していたならば、このような思い切った行動は取らなかったであろう。それはほとんど自殺行為に等しいであろうから。あるいは彼のこの行動には、塩谷宕陰門下として漢学の素養を積み、哲学を好んで『儒家哲学本義』という著書もあった父親の影響が窺て取れるかも知れぬ。現在でもそうだが、彼が医者として世に処したならば、物質的には甚だ恵まれた生活を送ったはずで、後述するとき貧窮の生活を送らなくてもすんだはずである。しかし、彼はそうした生活は一顧だにしないで、自己の本性の好むところに従った。

遠湖は明治25年に熊本の第五高等学校に赴任しているが（因みに、夏目漱石が松山中学校から五高に転じたのは、明治29年である）、それより前の明治20年から25年に至るまで、当時の欧化主義全盛の風潮の中で、漢文では食えないから、衣食のためにドイツ語の教養をもとに売文生活をした。このことは、遠湖に儒学者としてのイメージしかもっていない者（私自身が既にそうであった）にとっては、非常に驚きであり、また意外でもあった。周知のように竹山道雄氏はドイ

ツ文学者であるが、甥の同氏（遠湖の夫人は同氏の母の姉に当たる）でさえ、「その意外に面くらった」と告白している。以下に遠湖のこの象面に関する、竹山氏のコメントを引用してみよう。

伯父はこのころに、アルントやシラーそのほかの詩の翻訳をした。みな漢訳で、あの長い詩シラーの『鐘』を完訳してある。ウインケルマンやレッシングを紹介したが、ことにヘルダーの国民文学の主張、コンラッド・アルベルティの自然主義写実主義の主張、それに対するビールバウムの駁論、それからジャン・パウルやハルトマン美学などを輸入している。

明治二十二年の『国民之友』愛読書十種をあげよというアンケートに対しては、カント道義学、ヘーゲル形而上学、ハルトマン審美学をあげている。（「最後の儒者」）

明治の大ジャーナリストの徳富蘇峰は、ある談話で明治時代に漢学をやる人は横文字（西洋語）を知らず、横文字を知っている者は余り漢学の方はうまくないといつて、その例外の「両刀使」として、フランス学の中江兆民（周知のように、彼は『民訳約解』により、「東洋のルソー」としてその文名は名高い）とともに、ドイツ学者として遠湖の名前をあげている。私にはドイツ学者としての遠湖の業績、その史的地位についてコメントする資格はないけれど、以上の事実は改めて明治時代人のもつ教養の底深さというものをまざまざと物語るものではないだろうか。（もっとも、竹山氏は「最後の儒者」の末尾で、遠湖老人にとっては、ドイツの学問や文学は所詮は一つの寄り道にすぎず、その方法を取り入れて東洋の学問に新生面を開くということはなく、昔ながらの道にかえって、古い型の儒者として終わったことを惜しんでいる）。ともあれ、遠湖は明治25年に第五高等学校に赴任し、爾後中央文壇とは縁が切れ、明治文学史からその足跡を消すこととなった。

四

竹山氏は一高生の頃に接した遠湖の印象を、「伯父にはあまり会ったことはなかった。いつ行っても、二階から大きな声がきこえて、朗々と単調に傍若無人に本を読んでいた。……きいていて思わずおかしくなった。何をしている人だかもよくは知らず、少年の私は

ほとんど関心をもたなかった。正直のところ、世にうとい奇人の老翁だくらいの、漠然たる観念しかもっていなかった」と、率直に告白している。また、「そして、会ったときには、慚愧にたえないことだったが、これからどんな奇癖を見せるかなと、好奇心をもって眺めていた」とも語っている。私が同氏の「最後の儒者」を読んでいて最も感銘を覚え、興味を惹かれたのは、次の一節であった。

あの二階の声は、唐人の寝言のようなものではなく、東洋の智慧がいっぱいにつまっていたのだったし、かつては明治の西洋文物吸収の草分けの一人として、逍遙、南槐、蘇峰、思軒、尾崎行雄などと共に行動し、戸川秋骨、上田敏、福田徳三、黒板勝美、宇野哲人などを教えた声だった。あの老いさらばえてこの世に処する力などはまるでないと思われる老人は、じつはあのころはまだ学問へのはげしい熱意を燃やしつづけていたのだった。すこし代がずれると、これほどにも何も分からなくなってしまうのであろうか？世の中の表での波に乗らないものは、これほどにも知られず埋れて断絶してしまうものなのであろうか？おおよそ、人の価値はその家庭の者には分からず、家族はただ社会的反映を通じて評価するわけなのであろう。(傍点は望月)

遠湖が親炙した楠本碩水は大正 5 年まで生きたが、晩年になるにつれて彼の心を深く把らえた喫緊きつぎんの一事があった。それは端的に、「斯文一綫の命脈」を江戸時代産のすべての学派が学派としての首尾一貫性を完全に失って断片的スクラップと化し終わった維新後に伝えるという使命であった。そして、熊本時代に数回碩水の許を訪れてその老碩儒の啓教けいけいに直に接することを得た遠湖が、大いにインスパイヤーされるところがあったことは想像に難くない。曩に第五高等学校に赴任することによって、遠湖は中央文壇とは縁が切れ、明治文学史からその足跡が消えたと言ったが、このことは、彼が儒学者としての自覚を層一層と深めていったことを意味しよう。そして、その産婆役を担ったのが碩水ではなかったか。上掲の竹山氏の文を理解する上で手掛りとなるものに、碩水の次の文がある。すなわち、論語に曰く、「人知らずして慍らず」と。易に曰く、「是とせられずして悶ゆる無し」と。既に「人知らず」と曰えば、則ち兄弟知らず、妻子知らず、鄰里郷党も亦た知らざるなり。既に「是とせられず」と曰えば、則ち兄弟・妻子・鄰里郷党も亦た以て是と為さず、而も慍らず悶ゆる無し。君子に非ずして何ぞや。(『碩水遺書』九)

碩水のこの文が直接にはいかなる事態を指して然く言われたものなのか、これだけでは判然としない。しかし、この文を上来の「斯文一綫の命脈」を江戸時代産のすべての学派が学派としての首尾一貫性を完全に失って断片的スクラップと化し終わった維新後に伝えるという脈絡に置いたとき、宛ら水を得た魚のように精彩を放ってくる。そして、この崇高かつ苛烈な使命の遂行は、必然的に碩水の生活を貧窮ならしめた。もっとも、貧窮という点では遠湖の日常もそれに劣らぬものであった。その消息についても竹山氏の次の文が参考となる。

内田家は極貧の境にあったこともあるらしく、時として原稿を書いてもそれを送る切手がなく、家主から借りてようやく送ったこともあった。無理をするので顔色も蒼白く、風邪はひきどおしという有様だった、という。

伯父は昭和十九年、八十七歳まで存命していたが、気の毒な戦中の老人生活をした。裾から綿がはみ出た着物をきて、寒中に炭もなく、せんべい布団にくるまっていたが、それでも「いまは火はどこにもないそうだな」といって、これがあたりまえという様子だったそうである。(同上)

歴史の審判が衰えるものと栄えるものとをきっぱりと分けた後代から遡って見ると、遠湖が医学を捨てて儒学に従ったことは、彼を必然的に時代遅れの人間とした。それにしても、明治以後において「斯文一綫の命脈をして天壤の間に墜ちざらしめんと欲する」ことは、かくも世間の無理解を耐え忍び、あまつさえ経済的な不如意を忍受することを要求するものなのであろうか。この事実直面したとき、われわれは「何のために学問するのか」という、最も単純にしてかつ最も根源的な問いに撞着する。そして、碩水の「学者は己の為にのみ。何の知不知を之れ問わん」(『碩水遺書』九)という言は、この問いに対する断固とした解答である。私は人知れず宋明時代の儒学思想を研究しているなどと思っているけれど、碩水や遠湖たちの学問に対する覚悟の前では、自分は一体何をやっているんだらうと茫然自失してしまう。私はこの小文を叙述することを機縁として、今更ながらに「何のために学問するのか」という問いの前に立っている。

附記 この小文を成すに当たって、資料的に多くを負っているのは、竹山道雄氏の「最後の儒者」である。このことは引用文に止まらず、そうとは一々断っていないが、地の文においても同様である。

退職を迎える最後の1、2年にあたって、2つのうれしい新聞記事に出会った。「となりのトトロ」などの映画で有名な宮崎駿監督が「十代、こんな本に出会った」（朝日新聞）で、吉野源三郎の「君たちはどう生きるか（岩波文庫など）」を挙げておられたからである。また、同紙の「時代のベストセラー」にも再度取り上げられ、池上彰氏がマスコミで紹介すると1カ月半で1年分売れたとのことである。この本は、作家山本有三が編集する新潮社の「日本少国民文庫」の一冊として配本されたもので、中学2年生のコペル君と大学を卒業したばかりの叔父さんがデパートの屋上で灯りのともり始めた街を見下ろしながら語り合う場面から始まる。このとき、コペル君は街を見下ろしている自分を見ているもう一人の自分に気づく。すなわち、天動説から地動説への転換を唱えたコペルニクス的発想に中学生の心が成長する有名な場面で、私達の使用した国語の教科書にも掲載されており、十代の私に大きな影響を与えた一冊だったからです。

私は、昭和20年生まれで、戦争を1カ月体験した戦中派(?)である。従って、幼少時代にはラジオはもとより本が一冊も無い家庭で育ち、好きな魚釣りは趣味ではなく食料確保の意味の方が強かった。ただ幸運だったのは、小学校4年生のとき、都城で最も立派な図書館が通学していた小学校に設置されたことである。4、5年生の放課後は、殆ど毎日図書館に通い、真新しい館内で真新しい本に囲まれ、アラビアンナイト的空想とトムソーヤやキャプテン・ジャック的冒険の空間をさまよい、砂漠でオアシスに出会ったような至福の時を過ごした。司書のお姉さんから、毎日閉館のときにキャラメルのおやつを頂くのも喜びの1つであった。当時の読書感想文がほとんど入賞した反面、恥ずかしい事では有るが、以後の私の文学や雑学の基礎知識は、このとき形成されたものがほとんどである。中学時代の図書館は、廊下を壁で仕切った粗末なもので、最初に述べた本との出会いが無ければ、記憶に残らないものであった。もっぱら、貸本屋で借りたシャーロック・ホームズに熱中した。高校時代もまた、都城で最も立派な図書館が建設されるという幸運に出会ったが、受験戦争は空想に耽る時間を与えてはくれない。それでもヘッセや啄木に熱中し、一人の作家を徹底して読む読書習慣が身に付いた。ゆっくり本が読めるようになったのは大学生になってから

で、それまでとは比較にならない立派な図書館で、文学書より歴史時代ものや推理小説を読みあさって、その後の読書傾向が確立した。

本校に勤務して一番驚いたのは、先生方の研究室は小さな図書館みたいに贅沢であったが、図書室は今まで見たなかで最もみすばらしいものでした。その後、立派な図書館が建設され、歴代の図書館長の努力で蔵書量も増え、学生の読書量も全国高専第1位を何回も占めたのはうれしい事でした。その後、他分野の仕事の忙しさのために図書館の存在に関心を失っていましたが、図書館そのものについて考えたのは、教務主事になって情報化対応室を設置するときでした。当時行われた一般科棟改修のとき、私は第2閲覧室に仮住まいでした。遠くに高千穂の峰を望み、季節とともに物質工学科棟との間にある木々の葉っぱが変化し、コーヒーを飲みながら読書をするという、たえて経験したことがないほど伸び伸びした気分をこの図書館の一隅で味わいました。かねてから、学生の為のゆとりある知的空間が欲しいと思っていた私にとって、都城高専にもこのような空間が存在したことは驚きでした。そこで、文部科学省に情報化対応室の申請書を提出するとき、初めて「知的オアシスとしての図書館」という言葉を使用しました。教職員を含めてあまり知られていませんが、本校の図書館は、1階が教務主事、2階の会議室が事務の管轄で、図書館長の管轄はほんの一部です。これらを全て図書館長の管轄とする。第1、第2会議室は楽信館に移設し、その跡を読書会等が開催できる研修室と喫茶の可能な第3閲覧室(JABEE対応学生及び教職員のみに)に改修する。また、情報化対応室を世界と情報交換できる情報分野、LL教室は言語分野、AVR室は映像分野を中心とした図書室として拡充し、小さいながらも全ての機能を持った総合的図書館、すなわち「知的オアシスとしての図書館」を夢みました。学生諸君にも、私が過去に体験したような至福の時を味わって欲しいと密かに思いましたが、実現出来たのは対応室のみで、この私的構想がほとんど実現されぬまま職を辞したのは少し残念でした。今は、誰かこの夢を実現してくれないかなと再び思いつつ、皆様にとって本校の図書館が知的オアシスとなり、生涯の一冊の本に出会う場所にならん事を祈念しながら、私は本校を去って行きます。本校の図書館の益々の発展をお祈り致します。

校内読書感想文コンクール入賞者発表

校内読書感想文コンクール入賞者（入選）

『人間失格』を読んで……………	機械工学科	第1学年	舩木 奨太
『高瀬舟』を読んで……………	電気情報工学科	第1学年	内村 友香
『地獄変』を読んで……………	物質工学科	第1学年	中村 俊大
『人の中の大きな銀河』……………	建築学科	第1学年	桐野莉可子
『友情』を読んで……………	機械工学科	第2学年	桑山 翼
『たけくらべ』を読んで……………	電気情報工学科	第2学年	押川 侑樹
『人間失格』を読んで……………	物質工学科	第2学年	八久保真子
『女生徒』を読んで……………	建築学科	第2学年	内窪 葵
『吾輩は猫である』を読んで……………	機械工学科	第3学年	吉澤 宥輝
『風立ちぬ』を読んで……………	電気情報工学科	第3学年	豊満 依奈
『ジークル博士とハイド氏』を読んで……………	物質工学科	第3学年	竹中 智咲
『春琴抄』を読んで……………	建築学科	第3学年	小嶋麻利名

校内読書感想文コンクール入賞作品

「人間失格」を読んで

1年 機械工学科 舩木 奨太

「恥の多い生涯を送ってきました。」

太宰治の遺書ともいわれる小説『人間失格』。その登場人物である大庭葉蔵の第一の手記の出だしである。自分の人生をあざ笑い、呪っているかのように聞こえる言葉だ。

私も、人前で恥をかき、消えてしまいたいと思ったこともある。しかし、自分の人生をふり返った時に、この言葉が最初に出てくることはまずないと思う。

私はこの文を読み、暗い気持ちになり、最後まで読むことができるだろうかと不安になった。しかし、一度読み始めると、熱中し、最後まで一気に読むことができた。

この小説は、人間を恐れ、自分の本心を語れず、苦しみ、道化によって、周囲をあざむきながら生きてき

た一人の男が、酒や薬物におぼれ、様々な女性と関わりながら、自殺未遂をくり返すという悲惨な物語である。

とても暗い内容なのだが、それでも夢中になって読み続けることができるのをみると、太宰治の書く文には、読んでいる時には、思わなかったのだが、人を引きつけるような魅力があるのだと思う。

私は、この小説を読んで、印象に残った場面が三つある。

一つ目に、葉蔵が第一の手記で語った「子供の頃の自分にとって、最も苦痛な時刻は、実に、自分の家の食事の時間でした。」という部分である。

食事の時間にさえも恐怖する。食べることが好きな自分にとっては、とても理解できない、信じられない

ことだ。何故、このような考え方をするのか不思議でたまらない。

そして、「自分の幸福の観念と、世のすべての人たちの幸福の観念とが、まるで食いちがっているような不安、自分はその不安のために夜々、輾転し、呻吟し、発狂しかけた事さえあります。」とある。

これには共感できる部分もある。私も自分が好きで面白いと思っていたことと、友人が思っていたこととが違ったり、自分は面白いとも思わないのに、面白いと言って周囲の人に合わせていた時もあり、自分と他人との違いに苦しんだこともあった。

しかし、食事など生きていくためのことからこのような考えに至ることは、考えられない。

二つ目に印象に残った部分は、「自分は竹一だけには、前から傷みやすい神経を平気で見せていましたし…。」という部分だ。

中学生のころの葉蔵は、それまでしてきたように、道化によってクラスの人気を得ていた。しかし、竹一には見抜かれてしまう。そして竹一を恐れるようになる。

私は、この文章を読んで、葉蔵は竹一を恐れていた

のだが、自分に似たところを感じ、竹一を友として思えるようになっていたのではないかと思った。家族にすら本当のことを言えない葉蔵にとって心の支えだったのではないだろうか。竹一との付き合いが長く続いていけば酒や薬物におぼれることはなかったのではないかと思った。

三つ目は、「父が死んだ事を知ってから、自分はいよいよ腑抜けたようになりました。」という部分だ。

私は、葉蔵は、父を恐れながらも、どこかで慕っていたのではないかという気持ちになった。葉蔵は、家庭を愛し、家族には本心を打ち明けながら生活したかったのではないか。

この作品が完成した一か月後に太宰治が自らの命を断ったことを考えると、やはりこの作品は太宰の遺書であり、葉蔵は太宰治自身なのだと思う。

この本は、私に、自分自身を省みるきっかけを与えてくれた。この本から様々なことを学んだが、今よりも成長してから読むと新しい発見がありそうだ。これからは、自分の人生について深く考えながら生きていきたい。

「高瀬舟」を読んで

1年 電気情報工学科 内村友香

大切な人が治らない病気に苦しみ、「死にたい」と、そう自分に訴えて来たならば、私はどうするのだろう。そして、どうすることが、本当に正しいことなのだろうか。

私はこの本を読んで、「安楽死」という問題や、人の人生というものについてすごく考えさせられた。

この話は、弟を殺し遠島を申し渡された喜助の大阪へ護送される間の心情や、同心として同船した庄兵衛の気持ちを描いたものである。

初め、庄兵衛は、いかにも神妙に、いかにもおとなしい喜助の様子や、庄兵衛のことを、公儀の役人として敬い、何事につけても逆らわぬようにしている喜助の態度を不思議に思っていた。それが、罪人の間に往々見受けるような、温順を装って権勢に媚びる態度でなかったからである。そんな喜助が気になり、庄兵衛は喜助にさまざまな質問をしていく。

もし、私が庄兵衛さんと同じ立場にいたとしたら話しかけることも、質問することも、きっとできないだろうと思う。どんなに不思議で気になる人だとしても、

ましてや罪人ならばなおさらだと思う。

この本を読むまではそう思っていたが、この本を読んで、その人のことを知りたいのであれば、その人と関わり、その人の心の中を知ることが大事だと思った。

私は、庄兵衛さんが喜助さんに「喜助。お前何を思っているのか。」「お前が今度島へやられるのは、人をあやめたからだという事だ。おれについでにそのわけを話して聞かせてくれぬか。」という質問をするまで、喜助さんんのことをひどい人だと思っていた。弟を殺しているのに、遠島を申し渡されたことを悲しくも思わない喜助さんを、「なんて人だ!」と思った。

しかし、喜助さんの「わたくしはこれまで、どこといって自分のいい所というものがございませんでした。」という言葉や、今までの苦しい生活の話の聞き、私は、喜助さんをまちがってとらえてしまっていたと思った。人の心の中を聞いてみるということは、本当に大事なことだと思った。心の中を知ること自分が思っていたその人とは、違うその人を見つけられるのである。また、人は、自分の居場所を見つけられるこ

とで、気持ちを明るく持つことができるのだと思った。

弟を殺したということだけを聞き、ひどい人だ！と、人を誤解してしまうのは、本当によくないことだと思った。喜助さんの弟は、治らない病気になり、早く死んで自分のために一生懸命働いてくれている兄に少しでも楽がさせたいと、自殺しようとしていたのだ。医者と呼ぼうとしていた喜助さんは、「医者がなんになる、あ、苦しい、早く抜いてくれ、頼む。」と頼まれ、弟を楽にしてあげてしまったそうだ。私は、その話を聞いて、「これがはたして弟殺しというものだろうか、人殺しというものだろうか。」と感じる庄兵衛さんと

同じように感じた。もし、大切な人が苦しんでいたら、私も喜助さんと同じような行動をとってしまったかもしれない。また、喜助さんとは逆にどんなに苦しくても、生きてほしいと医者を呼んでいただろうか。私には、どうすることが正しかったのか、全く分からないが、これが本当に人殺しというものになるのか疑問に感じてしまった。

私はこの本を読んで、「安楽死」という問題について真剣に考えることができた。また、人の心を知ることの大切さを知ることができた。

『地獄変』を読んで

1年 物質工学科 中村俊大

地獄、それは宗教的死後観において、複数の死後の世界のうち、悪行を為した者の靈魂が死後に送られ罰を受けるとされる世界である。厳しい責め苦を受けるとされる。魔界と同一視されることもある。素朴な世界観では地面のはるか下に位置することが多い、と記されています。

人々にとって地獄はとてもつらいことや恐ろしいことなどの例えに使われていると思われます。

しかし人々の本当の地獄とはどのようなものなのでしょう。それはこの『地獄変』の登場人物「良秀」が見たようなものなのかもしれません。

この話の主な登場人物は三人。腕は確かだが性格が悪く嫌われものの絵描き良秀、良秀には似ず、優しい性格で父思いの良秀の娘、そして娘を気に入っているが良秀は嫌っている位の高い大殿です。

良秀は悪い人間に思えますが、娘だけは大切にしています。

そして重要なのは話のクライマックス。大殿に地獄変の絵を描いてほしいと言われた良秀はそれを了解し、地獄変の絵を書き始めましたが、最後に一つどうしても書けない。それは、業火に焼かれ苦しむ女性。実際に見たものしか描けない良秀はこれを大殿に相談しました。すると大殿は笑いながら、炎に焼かれる女性を用意すると言いました。当日、用意された女性は、なんと良秀の娘。炎に焼かれる娘を助けに行くかと思いきや、良秀は助けに行きません。いや、初めはそこに娘がいることに驚き、向かおうとしましたが、立ち止まり、なんとその絵を描き始めました。そして良秀の描いた絵は最高のできとなりました。最後に良秀は

首を吊って死んでしまう、といった話です。

この部分だけでも、もの凄い恐怖を感じます。

良秀の苦しむところを見たいがために娘に火を放った大殿、さらに恐ろしいのは最愛の娘が焼かれているのを黙って見ていた良秀。

最愛の娘が業火に罪なく焼かれ死のうとしている時、悲しみも怒りも、なんとか救おうとする人間の情も忘れ果て絵筆を取ってしまうというのは、人間とは思えない異常なものだと思います。

そして良秀が描いた地獄は本当の地獄だったことでしょう。

しかし、良秀は炎を見たま描いたのではありません。大事なものを失くす悲しみに地獄を見た、あるいは絵を描くために、娘を救おうとしなかった自分の心の醜さに地獄を見たのかもしれません。

最後に自ら命を落としてしまう良秀。

ここには少し良秀の人間らしさを感じました。きつと地獄変を描き終え良秀は、「異常」から「普通」の人間となり、「異常」だった自分に、そして本当の地獄を知ってしまったため生きていくのに恐怖を感じたのではないのでしょうか。

良秀は、絵師としては紛れもなく天才でした。しかし、こういった並外れた天才が皆、幸せな人生をおくれたのでしょうか。この話の作者芥川龍之介が生涯悩み続けたように、良秀にも天才が故の悩みがあったのでしょうか。心に映った地獄を客観的に表現することができる良秀にとっては世の中のつらさ、醜さが分かっていたのかも知れません。

僕は人が人の心を失った時、そこに地獄が生まれる

のだと思います。

良秀のあの時の行動は最後まで理解することができませんでした。そこまでして地獄変を描きたかったのでしょうか。

『人の中の大きな銀河』

小学校高学年に上がったばかりの頃でした。

私は、その本に出会ったのです。

—— 宮沢賢治著、『銀河鉄道の夜』に。

その時、私の感性は乏しく、「何だかよく分からない、不思議な話」の一言で感想を述べる以外、何も思いつきませんでした。

しかし、今改めて読んだこの物語には一言では表せない程、深い意味が込められているように感じました。

この物語を導く、ジョバンニとカムパネルラという二人の少年。彼らは銀河鉄道に乗り合わせ、旅をしていきます。それはまるで夢のような世界なのです。しかし、この二人には大きな隔たりの壁がありました。それは「生」と「死」。ジョバンニが生きている者でカムパネルラが死した者であるということ。ジョバンニは銀河鉄道を夢で見っていたというのに、目覚めた後にカムパネルラの訃報を耳にします。この銀河鉄道とは、死者一人一人の魂を然る場所へ送り届ける列車だったのです。これは、現代に有りうる「虫の知らせ」と言えるでしょう。

しかし、果たしてそうでしょうか。確かにジョバンニは夢を見ていました。しかし、その夢うつつの中では彼は全てを自分の意志に委ねて行動し、その夢想での出来事を全て覚えていたのです。そして必見すべきは、ジョバンニがカムパネルラの死を聞かされた時に泣かなかったということです。彼は夢の中の銀河鉄道でカムパネルラがこつ然と姿を消した時に声をあげて泣いたというのに、泣かなかったのです。本当に、それでも銀河鉄道は想像の産物と言えるでしょうか。二人の壮大な魂の旅路は、まるで本当に宇宙が果てしなく大きいと同じように、人が生き抜いた末にたどりつく場所が、どんなに手をのばしても届かない場所にあるように、私には感じられました。

私はこの物語の中で強く心引かれた言葉があります。

—— 「ほんとうにみんなの幸のためならば僕の中からだなんか百べん灼いてもかまわない」

しかし、人間そういった立場に陥ったらどうなるか分かりません。人の心はいつ地獄に変わるのかは、分からないのだから。

1 年 建築学科 桐 野 莉可子

しあわせ。では、本当のみんなの幸とは、一体何なのか。

それは誰にも具体的には答えられないでしょう。

ある人は愛を、ある人は富を、ある人は他人を虐げる事を幸せと言います。

この人類共通する幸せとは何か。

では、「人の幸のため自己犠牲を厭わない」と言う考えは善き事か。

それは、究極の美德とも言えるでしょう。

ある人は家族のため、ある人は恋人のためと思うはずでしょう。

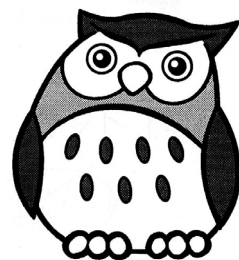
しかし、この疑問に対する答えは最初から存在しないのではないのでしょうか。宮沢賢治はきっと何が人の幸せか、幸せのために自分が何をするか、という具体的なことは求めていないはず。「人の幸を願う」ことを、「一人一人の幸せのために自分ができる無償の愛」を大切にしてほしいという思いなのではないのでしょうか。

私はこの物語を読んでいくつか考えたことがあります。しかし、それでも深く感じたことは、この『銀河鉄道の夜』を完全に理解するはもっと先になるだろうということです。

この物語は文字通り銀河のように未知が多すぎます。きっと私はこの物語を一割も理解できていません。

だからこそ、私は次に『銀河鉄道の夜』を見る時、どこまで理解を深めることができるか楽しみで仕方ありません。

たとえ、理解をしきることにとどれだけ時間がかかったとしても、本に対する追究心がある限り私はこの物語を読み続けるでしょう。



『友情』を読んで～

2年 機械工学科 桑 山 翼

「野島よ、許してくれ。」

この言葉は、この物語の主人公の親友である大宮が、やっと自分の気持ちに素直になった時の言葉です。多くの決意の言葉があるこの物語の中で、一番友情を感じさせる言葉だと私は思います。物語の中で野島と大宮の友情の表現の仕方は全く逆だと思います。主人公の野島は、心の中では大宮を尊敬し、自分にとって大宮がどれほど大きな存在か分かっているのに、嫉妬心とかライバル心が強く、大宮のことをどこか認められないでいる。それに対し大宮は野島とは逆で、野島の為なら恋愛や仕事など何でも相談にのり、上手くいくよう助言をするなど、自分以上に野島のことを思っていた。一般的にみれば、誰もが大宮の方が友情が厚く、良い人だと思うでしょう。私も大宮の友情はとても素敵だと思います。しかし、私はどちらかというと野島の方に似ていると思います。同じ目標に向かっている友人が先に成功したら、私は友人の成功を喜ぶ心の中に嫉妬が生まれてくると思います。その悔しいという気持ちは、同じ目標に向かっていた友人だからこそ生まれ、それによって自分も頑張ることができたなら、これはお互いに友情で結ばれていたからだと思います。

最初に書いた一文は、大宮の友情をととてもよく表しており、友情の中の友情と思える場面の言葉です。主人公の野島は杉子という女性を好きになるが、よりによって杉子は野島の親友である大宮に好意を持っていました。杉子の気持ちに気づいた大宮は、実は自分も杉子に気があったが、野島のことを思い西洋に旅立ってしまう。しかし、物語の最後には最初に書いた一文を野島に伝え、杉子の思いを受けとめます。私は、なぜもっと早くに杉子の思いを受けとめてあげなかったんだろうと思います。親友のことを思い西洋に旅立つという行動は、本当に親友のことを思っているならしないと思います。げんにこういった行動がさらに野島の心を傷つけました。親友だからこそ、大宮は西洋に行くということよりも、野島に自分の本当の気持ちを伝えてあげた方がよかったと思います。もし自分が大宮の立場だとしたら、きっと野島に本当の気持ちを伝え、杉子にもちゃんと好きという気持ちを伝えると思います。

野島のことを思って大宮がとった行動は、色々な形

の中の一部の友情のような気がします。付き合いが長ければ長いほど、お互いのことを知り、何でも言い合えるものだと思います。時には対立して喧嘩することもあると思いますが、それも、お互いが友情で結ばれているからこそ起こるものだと思います。物語の最後では、大宮と杉子はやっと互いの気持ちを知り恋人となりますが、そのことを知らされた野島は、怒り、悲しみ、嫉妬、多くの感情が入り交じる中で、大宮に「これからは仕事の上で決闘しよう」という手紙を書きました。このことから、二人の間には厚い友情があり、本当の親友だったんだなあと感じることができました。

私にも友人はいます。しかし、その中で親友とよべる人はまだ一人しかいません。これから先の長いであろう人生の中で、本当の親友とよべる友人を少しでも多くつくってみたいです。

この『友情』という本は、一度読んだだけでは全く内容が読みとれず、何度も何度も読み返しました。読み返していくうちに多くの友情の表現の仕方を知ることができ、人間がとても複雑な生き物だと分かりました。この本のおかげで、友情の大切さ、難しさを感じることができて本当に良かったと思います。



『たけくらべ』を読んで

2年 電気情報工学科 押 川 侑 樹

この本を読んで大変だったことは、最初、全くといっていい程理解できなかったということである。普段、このような文学を読まないため、文自体が難しく感じ内容を正確に把握できなかった。その様な場合は本をかえればいいと思うのだが、先生の解説を聞いていてピンときた本が、この「たけくらべ」だった。それで、この本を二・三回読み直してみたり、ネットであらすじを調べたりと頑張ってみることにした。

改めて読んでみてとても印象深かったのが、「大川一つ横たわって」という部分である。本の中での訳は、「二人の間に大川があって気持ちが通い合わないこと」とある。これは美登利と信如との何ともいえないすれ違いを表している。

ある出来事をきっかけに、自分の事を色々と噂されるのが嫌いな信如は、美登利に対して素っ気ない態度をとるようになった。最初は気づかなかった美登利も、信如の態度に対して段々腹がたって、信如の悪口ばかりをいう。この悪口が信如に対しての好意の裏返しであるということに、美登利自身は気づいていない。

この頃の年というのは難しいもので、自分の好意を、中々素直に伝えられないものである。子供の頃のように素直に感情を表すこともなく、かといって大人のように臨機応変に対応するわけでもない。恥ずかしさと頑固な意地が邪魔をする。自分にも思い当たる節があるなど思いつつ、過去を振り返ってみた。もしかしたら、今の自分も昔と何等変わってないのかもしれない。素直にお礼を言えないところや相手に好意を伝えられないところ。変えていかなければと思うが、気恥ずかしさが邪魔をしてくる。そんな自分だから、二人のす

れ違っていくこの部分が、心に強く残っているのかもしれない。

そんな二人も、子どもだった自分たちに別れを告げ大人になっていく。美登利は髪の毛を島田に結い、信如は僧になるための学校に入り、子どもの時間に区切りをつけた。僧としての人生を歩む信如の世界と、遊廓の中だけの美登利の世界が変わることはない。最後の方で、信如がなにもいわずに残していった水仙の造花は、そんな二人の叶わぬ恋の終わりを告げているようだ。

だれもが、子どもだった自分と別れ大人になっていく。信如と美登利、この二人と同じ様に。大人になって初めて気づくもの、あるいは見えてくるものがある。子どもの頃は理解できなかった感情や行動など。恋心も、またそのうちの一つだ。二人が自分たちの気持ちに気づけたのは、二度と交わることのない大人になってからだろう。最後に送った水仙の造花が、そんな二人の気持ちを表しているようで悲しい。

樋口一葉は二十歳で作家として活動を始め、彼女が書いてきた小説はどれも有名なものばかりである。特に、今回読んだ「たけくらべ」という小説は、吉原遊廓周辺を舞台にしており、当時の生活を生々しく書いている。平成を生きる私達にとって、明治時代の生活の様子は架空の出来事と何等変わらない。そんな私達が、「たけくらべ」という本を通して、当時の人達の生活や考えを知ることができる。信如と美登利の様な恋やすれ違い、今も昔も変わらない何か、そういうものを知ることができるのである。

『人間失格』を読んで

2年 物質工学科 八久保 真子

人間に「失格」も「合格」もあるのだろうか。私はこの本を見て初めてそう思った。そもそも、人間が人間である基準なんて存在するはずはないし、判断する人もいない。しかし、なぜ、この物語の主人公は自分を「人間失格」と思うほど、絶望してしまったのだろうか。

まず物語は、主人公葉蔵の幼年時代から始まる。私

は、この時代の葉蔵は実に子供らしくない子供だなと思った。例えば、葉蔵の

「人間に対して、いつも恐怖に震えおののき、また、人間としての自分の言動に、みじんの自信を持たず、そうして自分ひとりの懊悩は胸の中の小箱に秘め、その憂鬱、ナアヴァスネスと、ひたかくしに隠して、ひたすら無邪気の楽天性を装い、自分はお道化たお

変人として、次第に完成されて行きました。」
という言葉がある。子供というものは、もっと素直に、自分のしたいように生きているものだと思っていた。少なくとも私が子供の頃には、このような考えなど一切浮かばなかった。後に人生が崩れていくのは、この少年期にも原因があったのではないかと考える。子供なのに大人の顔色ばかりうかがい、欲というものがほとんど無いのだ。私は、葉蔵の気持ちを考えると、どれほど楽しくない、孤独な時を過ごしたのだろうかと思いつつも悲しくなった。

次に、一人の女性との出会いがあった。ツネ子といい、葉蔵の初恋の相手であり、「恐怖からも不安からも、離れる事が出来る」女性だった。しかし、二人で海に飛びこんで自殺をしてしまう。葉蔵は命を取りとめたが、ツネ子は死んでしまったのだ。どれほどの後悔を感じたことだろうかと、私はとてもつらくなった。

そして、この事件から、葉蔵の人生は、徐々にどん底へと向かっていくのだった。女性の家を転転としては、酒に溺れ、自分というものを失ってしまった。ついには、薬中毒患者になってしまい、一人では生活できないようになってしまう。なぜこのようになってしまったのか、それは、やはり、人を信頼し、もっと自分の気持ちを正直に口に出して表現した方がよかったのではと思う。自分の美貌のせいにし、人の真心が分かっていなかったのではないだろうか。そうして、葉蔵は静養先で、

「人間、失格。もはや、自分は、完全に、人間で無くなりました。」
という言葉を残している。葉蔵は人生というものを大切に思うからこそ、このようになってしまったのではないかと考えた。

最後にこの本を読んで、私は、このような人生は決して辿りたくはないと思うのと同時に、二つのことを得た。

一つ目は、人の助けを必要とすることだ。助けにくてくれるのを待つのではなく、自分から口に出して「助けて」と言うことだ。人間は、一人では生きていけないという言葉の意味が少しは分かったような気がする。しかし、子供ではないのだから、助けてもらうだけではなく、自分もその人のことを大切に、助けあっていくことが必要なのだ。葉蔵は、父の死を知っても、自分の失敗を父のせいにしてしまっていた。自分を育ててくれた恩人に対して、感謝の気持ちもなく、なんてかわいそうな人だろうと思った。

二つ目は、自分は今幸せだと感じることだ。葉蔵は自分は不幸だと、本当に、それは子供の頃からうつ病のような状態だった。もっと自然に、うれしい、おいしい、楽しいとプラスに感じることはできなかったのだろうか。もし、私が、この物語の中へ入れたとしたら、葉蔵にそう教えてあげたかった。

やはり、人間に「失格」も「合格」もないのだ。

『女生徒』を読んで

2年 建築学科 内 窪 葵

幼い時は自分が思うままに正直に何でも言えた。しかし成長した今は周りの人の目を気にして嘘の自分を作ってしまったって本当の気持ちを隠しているという人が多いのではないのでしょうか。この本を読み終えた後にそう考えました。

この本の主人公の女の子は、日常生活の中で見たり聞いたり、一つひとつの事を体験していくうちに疑問に思っていることがありました。それは「本当の自分がどれだか分からない」ということです。自分の気持ちと他の人の気持ちが全く違った時のことをお母さんに伝えると怒られてしまい、お父さんには「中心はずれの子」だと言われてしまうのです。彼女はお母さんを悲しませたくないという気持ちとその裏で自分の個性も大切にしたいという気持ちの間で揺れていまし

た。

確かに人間関係の付き合いなどで自分の本当の気持ちとは違うことを言うことは必要なことなのかもしれませんが。そうやって社会が成り立っている事も知っています。子供と大人の間に挟まれている私たちが少しずつ分かっていく世間のルール。今までのように正直なばかりに生きていくのはいけないことなのではないでしょうか。

この本を読み終えた後、主人公と私は似ている所があると思いました。私もどちらかというと自分の意見は曲げずにはっきりと主張してしまう性格で、「周りの人に流されない」という気持ちが強いのです。だから彼女の気持ちがすごく分かりました。私もこの性格で今までに何度も悔しい思いをしたことがあります。

どんなに私が間違っていると言っても他の人が全員正しいと言えばそれが正しくなってしまうことがあります。それでも私は「間違っている事は、間違っている」とはっきり言えるこの性格を変えるつもりはありません。たとえ他の人にそれを批判されたとしても自分の気持ちを押し殺すことだけは絶対にしたくないのです。なぜなら、本当の自分を分かってもらいたいし本当の気持ち同士で他の人ともぶつかっていききたいからです。

しかしそんな私も彼女と同様その狭間で揺れているのだと分かりました。「勇気のある行動をしても、そのあらゆる結果について責任が持てるかどうか」この本に書かれてあった言葉です。矛盾してしまうかもしれませんが、今まではこの性格でやってきたけれどこのままで本当に良いのかと思うこともあります。この

ままの自分だと親しい人達もいつかは離れて行ってしまおうのではないかと思いますし、社会で長く生きていくには余計なことは言わず話に頷いていればきっと損をすることもなし傷つくこともないだろうと、私なりに考えている事もあります。

だから、悩んでいるのです。彼女も私も。どうすれば自分に正直に生きていけるのでしょうか。これはきっとこれからも考えていくべき事だと思います。

「何か世の中から聞こう聞こうと懸命に耳をすましても、やっぱり、何か当たりさわりのない教訓を繰り返して、まあ、まあとだめるばかり」

そんな世の中では絶対にいけない。正しい人が馬鹿をみる世の中では絶対にいけないとはっきり言えます。彼女や私のような人は本当はもっとたくさんいるはずです。だから私はこれから先も本当の自分で居続けたいです。

正直に生きていける世の中が来ることを信じて。

『吾輩は猫である』を読んで

3年 機械工学科 吉澤 宥輝

「元来この地球は誰のものでもない。それなのに人間は我が物顔で誰々の所有地だと決める。」

これは猫の一言で、一番気になった。最初は意味不明だったが、改めて考えるとすごく意味がこもっていると思ったからです。現在の日本は、「民主党を支持すべきだ」とか「自民党の方がいい」とかいう。世界では、戦争や同時多発テロなど、人間同士で争う。動物、植物などの生き物は蚊帳の外。人間が出した有害な物質で地球温暖化になり、住みかをなくす。被害を受けて死ぬ。この地球上を人間が支配しているように。僕はこの事を言っていると思いました。すべてのものが共存するのは難しいと思います。ですが、同じ種類のもの達が一つになれば、共存するのも遠くはないはずです。人間なら人間同士、動物なら動物同士、植物なら植物同士、みんな仲良く一つになればいいなと僕は思います。

僕がこの「吾輩は猫である」を読んだ理由は単純です。ただ猫が好きだからです。猫からの人間世界に対する視点が気になったからです。ここで、この物語の主人公「猫」について説明しましょう。猫は元々野良猫で、そのため名前はありません。ある日、餌を求めて侵入した民家に飼われる事になります。ねずみ捕りよりも睡眠を好む。しかし、運動をすることも好む。

そして、男として女に恋をする。僕からしてみれば、他人とは思えない猫です。この物語は、そんな猫の「人生」いや「猫生」を描いたものです。

「猫はいいなあー」誰もが一度は感じた事ではあると思います。仕事が忙しい時、夏体みの宿題が溜まりすぎて焦っている時、夜ふかしをした時に必ず感じるはずはです。僕もあります。祖父母の農家の手伝いで疲れて休憩しようと軽トラックの助手席を見たら、飼い猫が気持ちよさそうに寝ていたのです。その時からもうたまらなく猫になりたいと思いました。が、猫も楽ではないようです。この物語が教えてくれました。一つ、人間のように物を握れないという事。猫の手は、人間の手のように指が長くないからです。二つ、猫にとって餅は魔物である事。餅を噛み切る事が難しく口の中につまるらしいんです。あのおいしい餅を食べる事ができないなんてかわいそうです。他にも苦はあると思います。猫も大変なんです。けど、僕は猫になりたいです。「苦もあれば楽もある。」です。僕の一つの夢です。

人間って猫からしてみればぜい沢な生き物らしいです。食べ物をそのままでいいのに無駄に手間をかけたリ、着るものだって羊や蚕や綿の世話になり、髪の毛だって自然に伸ばせばいいのにわざわざ手間を、他に

も足が4本もあるのに2本しか使わない事がぜいぜい沢らしいです。ふと考えると納得です。他に、人間は自分勝手な生き物らしいです。人間の子供にいたずらをされ、怒り少しでも手を出そうものなら、家中総がかりからこらしめられるからだそうです。これは自分の考えだが、犬などに服を着せるのも人間の自己満足でし

かないと思う。人間を別の視点から見ると、こうも悪い生き物だとは思ってもよらなかったです。これまでの自分を反省。

物言を別の視点から見るという事は、いい事ですね。おもしろいですし。これからは、悩み事や考え事に対してそういう目線で考えようと思います。

『風立ちぬ』を読んで

3年 電気情報工学科 豊満依奈

死というものは、悲しく、虚しいだけのものと思っていました。いつかは自分も死んでしまう、と考えると、今の生活などどうでもよくなってしまいます。ですが生きている間、誰かの愛に触れることができたり、もしくは自分が何かを愛せたりすると、もっと生きたいと思う気持ちも高まるし、逆に命を終えるときに、心置きなく奇麗に死んでいくことができると思うのです。

主人公は婚約について、「二人の人間がその余りにも短い一生の間をどれだけお互いに幸福にさせ合えるか?」と考えています。今私は十八歳で、人並みに恋愛もしていますが、お互いが愛し合っていて、だから交際をする、このようなものにしか考えていませんでした。若い恋愛にありがちな、「好きならなんとでもなる」という気持ちが、私にもありました。交際と結婚は全く違うと、テレビや雑誌、または結婚している知人から話を聞くことがあります。そのことについて今まで深く考えることはありませんでしたが、主人公のこの一文で、いろいろと考えるきっかけになりました。結婚するということは、今後の一生を共にしていくということ。しかし私は、私達の年代で言う交際と、結婚と、大事なことは同じなのではないかと思います。愛し合うということは、ただ「好き同士」だけでなく、お互いのことをどれだけ思いやり、お互いの幸せをどれだけ考えてあげられるかが大事なのだと思いました。携帯電話やメールが普及し、大事な言葉も軽々と発せられる時代ですが、言葉にもっと意味を込め、重みを持って使いたいと思いました。

また主人公は、彼女を看護するために何ヶ月もの間、

山の奥で一緒に暮らしています。自分の仕事もあり、やりたいこともたくさんあるかもしれないのに、時間を割いて何よりも彼女と一緒に過ごす時間を優先できる姿は本当に素敵だと思いました。それが彼の幸せだったのであり、彼女にとっても幸せだったのでしょう。このように、お互いが本当に必要とし合っている関係は、本当に素敵でいいものだと思います。

そしてもう一つ、私が深く意味を考えたものがあります。「幸福の思い出ほど幸福を妨げるものはない」という一文です。私は今までにたくさんの思い出があります。それはもちろん幸福な思い出もあったし、その分、つらい思い出もたくさんあります。その中で幸福の妨げになるものは、私だったらつらかった思い出だと思います。楽しかったり、嬉しかったりする幸福な思い出は、思い出すだけで幸せになれます。主人公はどのような気持ちでこのことを考えたのでしょうか。いくら考えても、私には分かりませんでした。しかし、まだまだたくさん生きていく中で、主人公と同じ考えを持つことがあるのでしょうか。できれば今後ずっと、幸福の思い出は幸福を増幅させるものであってほしいと思います。

この本を読んで考えたことは、大きくまとめると、死と愛です。これから何年生きるのかは分かりませんが、自分が死んでいくときに嫌な思いや後悔を残さないよう、生きようと思います。そして、誰か一人でもいいので、しっかりと深く愛し、愛されれば、幸福な人生だと思います。愛について語るには、まだまだ若い年齢であるかもしれませんが、これから生きていく中で、もっと学んでいきたいと思っています。

『ジーキル博士とハイド氏』を読んで

3年 物質工学科 竹中智咲

あれだけ外国文学者の本は読まない決めていたのに、結局手に取ったのはスティーヴンソンの「ジーキル博士とハイド氏」。前回本を読んだ時も外国文学者の本で、外国人の独特な言い回しや、訳のされ方に悩まされたのであった。

内容はというと、主人公ジーキル博士は富と名誉と徳行とで社会から重んぜられる人物であると同時に、人知れず悪行に身をゆだねる二重人格者であった。その内部の悪心を自由に解放する道を求めた彼は、おのれの知力によって薬品の力で、おのれの分身ハイド氏の創造に成功するが、しだいに彼の本性はハイド氏そのものになってしまったという話である。

「二重人格」の代名詞ともなっている「ジーキルとハイド」。正直理解できないだろうなと思っていたので、読み終えて圧倒された。ジーキル博士は非常に人間的であって、現代社会を見ているようだった。周りからは尊敬されるような人が薬物に手を染める。一度だけとでも思っているが依存してしまう。遂には薬物に飲まされる始末。こんなこと最近のできごとで、また自分には関係ないことだと思っていたけれど、誰にでもそんな弱い部分があるのかなと思った。

本文の一文にこんな言葉がある。「苦悶する意識の胎内にこの両極端の双生児が絶えず相争っていること、これが人生の災いでなくてなんであろう」。自分にいいところばかりあればいいけれど、人間決してそうではない。悪いと分かっているがやってしまったことや、自分に負けてしまったこと、人によっては大きな悩みになる。結果的にはジーキル博士はハイド氏と

なって自殺してしまったが、ジーキル博士の考えはとも共感でき、また考えさせられた。

自分がもしそんな薬を手に入れたらどうしただろうか。興味本位で飲んでしまったら？これまで自分の顔と呼び慣れていた不完全などっちつかずの顔より、善と悪を二分して享乐的に生きてみようか。きっと答えはNoが正しい。全人類社会において、われわれが会うほどの人々は、すべて善と悪の混合体であってそれが全て正しい。完璧な人間なんてつまらない。不完全で、それぞれ違うから、「人」は「他」に興味をもち、つながりができる。この考えが正しいことを前提に、人間には自分の嫌な所や自己嫌悪を含む葛藤があることを私は信じた。

そんな気持ちが一人一人にないと、これから先、二十一世紀はやってはいけない。進みゆく情報機器や必要以上に機能のついた電化製品を含む、便利への発達は仕方がないが、そればかりに気をとられ、個人だけに集中していると取り返しのつかないことになる。世の中は動いているのだから、今まであたり前であったことがあたり前でなくなることだってある。そんなことにも気がつかない社会になってしまうことはなにより恐ろしい。

ジーキル博士の二の舞になってしまう人が現れぬよう、今まで以上に道徳というものが大切であろう。それが、その人を変えるきっかけになってくれたらなにより嬉しい。皆が幸せになれる。

「ジーキルとハイド」、この言葉にはいろんな意味が詰まっていた。

『春琴抄』を読んで

3年 建築学科 小嶋麻利名

この「春琴抄」という小説はまず作者が春琴の墓をお参りするところから始まる。

春琴は幼くして盲目となり、三味線や琴を習うため師匠のもとにかようようになる。その時に佐助という丁稚と出会い、お互いに恋心を抱くこととなる。

しかし佐助は春琴に三味線を教わる師弟関係であるため、恋仲といえど、あくまで師弟としての関係にこだわっていた。

そしてなにより佐助は春琴の盲目だからこそその美しさを崇拝していた。

だが、春琴の美貌はなにものかによって無残に傷つけられる。美しいままの春琴だけを覚えていたい佐助は、自ら盲目となり、盲目だからこそその幸福を手に入れることとなる。

この小説でとにかく目をひいたのは、佐助の春琴に対する異常なまでの美へのこだわりである。

この小説を読むかぎり、お世辞にも春琴は良い性格とはいえない。佐助は苦労ばかりかけられている。それでもなお佐助が春琴を慕っていたのは、春琴の美貌があったからだろう。

また、美に対しての執着でいうと、春琴もすさまじいものがあるように思う。自身が気高く美しくあるために、従者である佐助との仲を認めず独り身でいるのだから。

狂気とも言えるような佐助の美への思いがあるからこそ、盲目の世界の、己の記憶と、視覚以外の感覚の中で幸福を得ることができたのだろう。

この小説では全体を通してあまり人物の思想などがえがかれていない。にもかかわらず、この小説の中には、あふれんばかりの二人の思いがつめこまれているように感じる。それがどのような思いなのか正確には知ることができない。しかし、感じるものがある。それはきっと、二人の、何かを隠すような、あるいは何かを訴えるような異常なまでの言動があるからだろう。春琴の結婚をこばむ様子や佐助にだけわがままを言う様子、佐助の春琴につくす様子や目をつぶす様子。一般的に見れば考えられないような異常な様子で

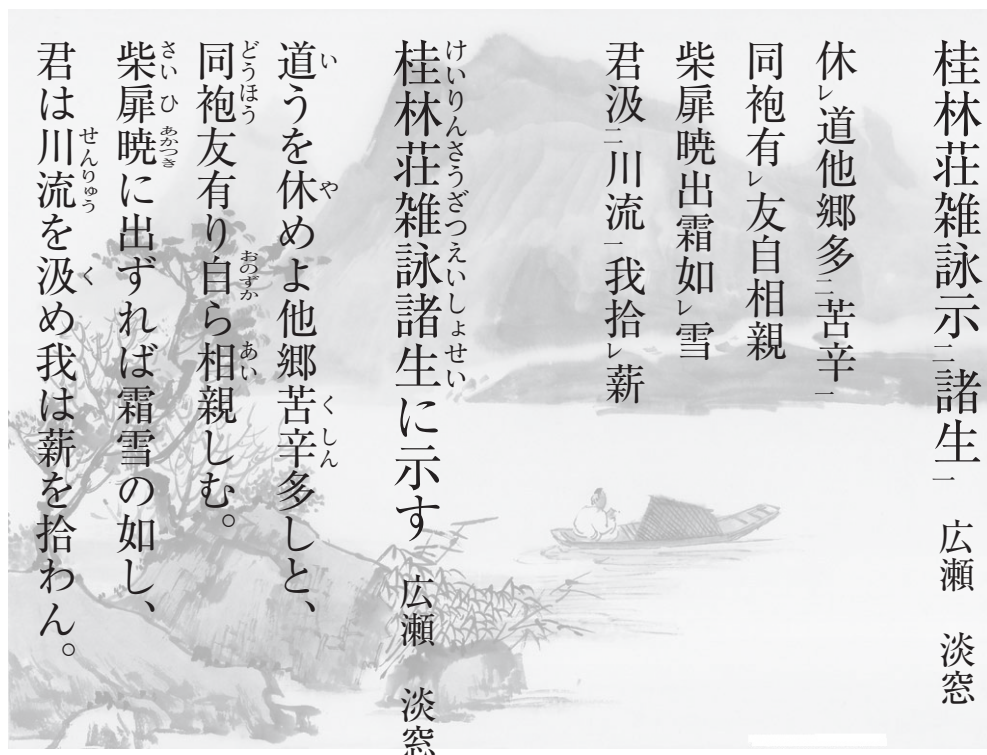
ある。しかし、だからこそ、一つ一つに強い思いが込められているように感じるのだと思う。

一つ一つの言動を小さく見てみれば、だれにでもあのようなことがたくさんある。この二人の場合はそれぞれが大きすぎてこれほどまでの悲劇ともとれるような結果になってしまっている。しかし、悲劇とは言ったが、逆に、究極の美の形としてもとれないこともない。美しいままの自分を見てほしかった春琴と美しいままの春琴を見ていたかった佐助が、佐助が盲目になることで、ずっと美の世界にひたっていられるのだから。

しかし、盲目になって幸せを感じられるかと言ったら、ほとんどの人は感じられないだろう。やはり、春琴の美にこれほどまでこだわり崇拝した佐助だからこそそう思えるのだと思う。

何が不幸で何が幸福だと思うかは人それぞれだ。だからこの物語の二人が幸福かどうかは簡単には語れないだろう。

しかし、この二人の物語が、美しさを求めた二人のように、一つの美しさの形であることに間違いはないように思う。



都城病院院長 小柳左門氏の講演行われる

演題「学ぶこととすること」



図書館では学生に対する啓蒙活動の一環として、昨年度より外部講師による講演会を企画した。今年度は国立都城病院院長、同付属看護学校長・小柳左門先生をお招きして、1月21日（金）、1年生を対象に講演会を開催した。

小柳先生は昭和48年3月、九州大学医学部を卒業、54年7月、アメリカ合衆国アイオワ大学内科学研究員、平成3年3月、九州大学医学部循環器内科助教授、平成13年4月、国立病院九州東医療センター、副院長等を経られて、同17年4月より現職。

講演の表題は「学ぶこととすること」。いささかでも『論語』に親しんだものならば、この表題が孔子の言葉から取られたものであることは明らかである。そして事実、小柳先生は精神形成において、『論語』が非常に大きなウェイトを占めていることが、講演の冒頭から語られる。先生は高校1年のころに、既に「人間が生きるとはどういうことか」、また、「勉強するとはどういうことか」という疑問に逢着したという。その時偶然に西郷隆盛の伝記を読んで、西郷が『論語』に深く養われた人であることを知る。そして、西郷に止まらず、江戸末期には体制を支持する人も、また体制を変革しようとする人達も、『論語』に触れて人間としての骨格を形成したことに気付く。先生は後に『論語』を自力で読むことによって、先の「生きるとはどういうことか」、「勉強するとはどういうことか」という疑問に対する解答を得たという。その地点から振り返って、高校の漢文の授業が勢い返り点の付け方、訓み方、漢字の書き方など、受験勉強に備える次元に止まって、その孔子の言葉が実は何を指示し、何を主張しようとしているのかということに触れていないと不

満を漏らされた。

紙幅の関係から、先生の講話を網羅することはできないが、その一端を要約するとしよう。先生は初めに『論語』冒頭の「子曰く、学びて時に之を習ふ、また説ばしからずや。朋有り、遠方より来る、また楽しからずや。人知らずして慍^{うら}みず、また君子ならずや」を読まれて、孔子は「学問することが喜ばしいことを最初に宣言した人」と定義する。そして、「学問することが喜ばしいこと」だということは、なかなか実感できることではないが、心の中に深く温めておくのがよいと、学生に語りかけた。また、このことの一つの典型として、吉田松陰が獄中であって囚人たちに『孟子』を講じたことを挙げた。続けて、ギリシアの哲人ソクラテスの言っていることと、孔子の主張とは根本的なところにおいて全然一致するという。次に「朋有り…」では、大分県の日田という僻^{へき}陋^{ろう}にあつて、広瀬淡窓^{たんそう かん ぎえん}の咸宜園^{かんぎえん}に全国から4千人の門人が集まって勉学に励んだことに触れた。次に「学びて思はざれば則ち^{くら}罔^{くら}し。思ひて学ばざれば則ち^{あやふ}殆^{あやふ}し」について。先生は医学の途を歩まれたが、その過程でこの孔子の言葉にどれだけ助けられたか分からないという。また、孔子のこの言葉を踏まえて、社会には学校で学んだこと以上のことがたくさんあり、自らの頭でその事項について主体的に考え抜く態度が大切だという。また、宮大工の西岡常一^{かんなくず}氏に師事した小川三夫氏が、修行時代に1枚の鉋屑^{かんなくず}を示されたことに触れて、教育において手取り足取り教えることも大事だが、最も大事なことは実は教えることができない。ある技を窮めるためには、絶えず精進をして機が熟するのを待つことが大事であるとも言われた。そして、循環器科医師としての自分



の経験に触れて、ひたすら患者の心臓の音を聴くことに努め、音を聴くことについては誰にも負けない。音を聴くことを肉体化するということを語られた。

上掲のプロフィールからも明らかなごとく、小柳先生は科学者（医師）である。その科学者が自分の精神形成の途上において『論語』に多くのものを負っているということを聞いて、一人の聴者である私（望月）は非常に驚いた。先生の講話は、対象が1年生ということもあって、非常に平明であった。従って、1年生が真摯に耳を傾けたならば、理解に困難を感じずというものではない。とはいえ、平明な内容だからといって、決して浅薄なのではない。それは宛ら深い水底が浅く浮き上がって見えるようなもので、先生が語られる一語一語は実はどれも含蓄がある。それ故、聴者には語られる言葉を深みから把らえる力量が要求される。

「一期一会」という言葉がある。「一生に一度会うこと」、また「一生に一度限りであること」という意味である。教室で毎日出会っていても、本当はそのつど一期一会なのだが、学生にとって小柳先生との出会い



は、文字通り一期一会かもしれない。私は1年の学生が、このたびの講演で小柳先生が若い世代に伝えようとしたメッセージとは何であるかをよく考えて、今後の学校生活の糧とすることを願ってやまない。

（文責 望月）

『今年度の活動と図書委員会の在り方について』



学生図書委員長 建築学科

副委員長 機械工学科

池田成史
浅野大樹

私達図書委員会では、昨年に引き続き
図書館を広く利用していただけるように活動を行ってきました。

はじめに

私ども図書委員が、組織の形をとったのは、4年前の望月図書館長就任の直後です。

そして、図書委員という組織も、私どもが2代目です。そもそも図書委員会の目的は…というほど難しい目的はなく、「みんなに図書館に来てほしい、来てもらうためになにかしよう」という、目的の下に集った団体です。

今年図書委員会としては、「広報活動」と「図書館のユーザビリティ（使いやすさ）を改善すること」の二点を主として活動してきました。今回は、私どもが何をしてきたかを記したいと思います。

図書委員会の活動

先代の大家さん、坂元さんのおかげで、活動のテンプレートは大体揃っていましたので、その流れに沿うことを基本とし、更に、当時はまだ実験的であった部分を現実に沿わせていく事も意識して参りました。

行ったこと

- ・ブックハンティング
- ・ブックレビュー
- ・図書紹介冊子作成

ブックハンティングでは、今までの「学生の自主性を侵害しない」方針から公序良俗に沿う範囲では、特

に選書への規制は行っておりませんでした。ライトノベルは大量に入れられがちだったという事、また、継続して続巻を入れる事が難しい現状がありました。

そこで今年からは、続き物の書籍に関しては

- (1) 続巻の出る可能性の無いものの、全巻一括購入。
 - (2) 既に冒頭の巻が入っているものの、続刊の購入。
- のどちらかに当てはまる物のみに限定してブックハンティングを実施することにしました。ブックレビューは、ブックハンティングで購入した本を紹介するタグを書棚に掲示してありますので、是非ご覧ください。図書紹介冊子は、各クラスの図書委員が各々1ページを受け持ち、図書館にある各々好きな本を紹介する、という冊子です。この図書館だよりが皆様の手に届く

ころには、クラスに配布されている事と思います。

また今年も、一昨年・去年と実施していたDVD上映会ですが、上映時期など様々な問題があったため、楽しみにしていただいていた皆様には申し訳ございませんが廃止しました。

今後の目標

今後の図書委員会の活動は、学生のみならず、地域の方にも多く利用されるような環境・使いやすさを追求していこうと思い、様々な企画などを考えております。

以上、図書委員会は、図書館の利用率向上の一助となるべく、鋭意活動していきます

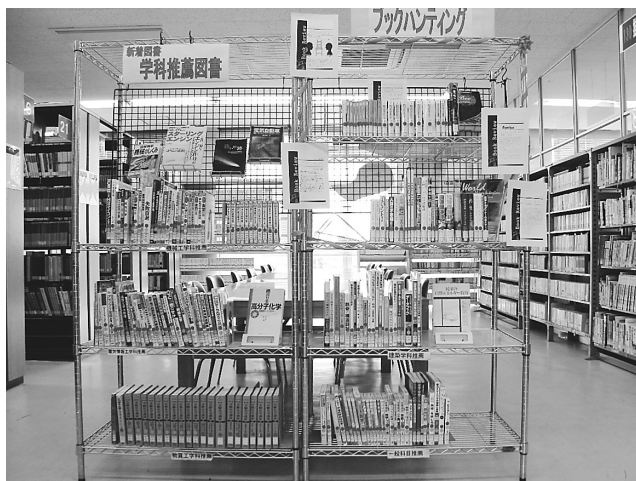
ブックハンティング実施される

平成22年度のブックハンティングが、10月20日(水)の放課後実施されました。

1年～3年生の図書委員が代表して、市内の書店で実際に手に取って一冊一冊確認しながら本を選びました。

選ばれた本は、約80冊。閲覧室のブックハンティングコーナーにありますので、利用してください。

また、学生図書委員の皆さんが作成した、Book Reviewも掲示してありますので、読書の案内として利用して下さい。



＜ブックハンティング＞で購入した図書抄 (2010 年 10 月実施)

書 名	著 者 名
プログラマーのためのソースコードを読む技術	高木信尚著
東大教師が新入生にすすめる本（文春新書 ;368,688）	文藝春秋編
渋沢栄一論語の読み方	渋沢栄一原著，竹内均編・解説
池上彰の学べるニュース	池上彰著
知らないと恥をかく世界の大問題（角川 SSC 新書 ;081）	池上彰著
伝える力（PHP ビジネス新書 ;028）	池上彰著
人体の不思議（にちぶん MOOK）	人体科学研究会編
五重塔はなぜ倒れないか（新潮選書）	上田篤編
卒業設計日本一決定戦 official book	仙台建築都市学生会議，せんだいメディアテーク編
World hyper interior （商店建築 ;2008 年 1 月 ,2008 年 7 月 ,2008）	高橋正明著
小惑星探査機はやぶさの大冒険	山根一真著
任天堂 "驚き" を生む方程式	井上理著
人体デッサンの基礎知識	バーリントン・バーバー 著 [郷司陽子訳]
江戸川乱歩傑作選（新潮文庫 ; え -3-1）	江戸川乱歩著
虫眼とアニ眼（新潮文庫 ;8383, み -39-1）	養老孟司，宮崎駿著

図 書 館 か ら の お 知 ら せ

図書館開館予定

今年度の夜間開館及び土曜日の開館は、3 月 1 日（火）までです。

次の期間は、平日のみ開館します。

期 間 3 月 3 日（木）から 3 月 31 日（木）

開館時間 9 時から 5 時まで

平成 23 年度の夜間開館及び土曜日開館は、4 月 5 日（火）開始予定です。

学年末・春季休業中の長期貸出について

通常 10 日間の貸出期間を学年末、春季休業中は長期貸出とします。

貸出開始日 2 月 22 日（火）

返 却 日 4 月 5 日（火）

帯 出 冊 数 7 冊



編/集/後/記

本年をもって退職される田原先生より、ご寄稿いただきました。若き日の本との出会い等をまじえながら、読書や本校図書館に対する思い出を語っていただきました。ご多忙の中、ご協力いただきまして、ありがとうございました。

今号には、今年度の校内読書感想文の入賞作品を、特集として掲載しています。入賞作品は、1 年から 3 年の全学生の作品から選ばれたどれも力作揃いで、昨年 12 月の集会で表彰されたものです。ご多忙の中、学生に読書感想文をご指導くださいました国語科の先生方に厚くお礼申し上げます。また、今年度も昨年度に続き図書館の計画により、外部講師として都城病院の小柳院長先生をお招きし、「学ぶことと思うこと」の演題で講演いただきました。1 年生担任の先生方にはご協力いただきありがとうございました。